明治モダン・大正ロマン・昭和レトロ

平成も残すところあと4か月。そこで今回は、時代の襷を繋いだ明治、大正、昭和を舞台とした本をご紹介します。

1冊目は、畠中恵/著 『アイスクリン強し』です。

時は明治23年。文明開化に賑わう中、真次郎は念願かなって西洋菓子屋・風琴屋を開きます。菓子作りの修行に専念したい真次郎ですが、次から次へと厄介事が舞い込めます。そこへ、彼を取り巻く愉快的友人・元幕臣「若様組」が、ビスケットにチョコレート、ワッフルスにシユウクリームなど甘いお菓子を目当てにやってきて…。江戸の色を残しつつも、変化していく時代の波に揉まれながら繰り広げられる、菓子屋の主人と若様組のドタバタ「スイーツ文明開化」です。どの世代の人も楽しめる甘くてモダンな一冊です。

2冊目は、原田マハ/著 『リーチ先生』です。

日本の美を愛し続けた英国人陶芸家バーナード・リーチとその弟子・亀乃介の半生を描く、史実に基づいたアートフィクションです。物語は、リーチ先生の世話役を命ぜられた亀乃介の息子・高市が、父がかつて先生の助手であったと知る場面から始まります。西洋と東洋の芸術の融合を夢に単身渡航した青年リーチと、芸術に憧れを抱き書生をしていた父、この若き日の出会いが二人の陶芸家の才能を開花させます。また、陶芸の先生は“「有名」だからいい、というわけじゃない。むしろ「無名」であることに誇りを持ちなさい”と説きます。こうした芸術家達との交友が彼らの人生を突き動かしていきます。明治、大正、昭和にわたって繋がる芸術家たちのロマン溢れる一冊です。

3冊目は、青島幸男/著 『人間万事塞翁が丙午』です。

舞台は、日中戦争から太平洋戦争終結にかけての日本橋堀留町です。そこで弁当屋「弁菊」を営むハナは、お店の切り盛りに大忙し。そんな中、ハナの夫に召集令状が届きます。出征、姑との確執、夫の浮気、お店の経営…混沌の時世においても、ハナは下町の江戸っ子らしい活力で乗り切っていきます。人情味あふれるご近所とのいきいきとした交流が、心地よいほどリズムカルに描かれています。疾風怒濤の時代をたくましく生きた人々の日々には、悲喜交々至るものがあります。下町風情が懐かしく蘇るレトロな一冊です。

図書館には今回ご紹介した本以外にも、芸術や文化にふれることのできる本が沢山あります。ぜひ図書館にお立ち寄りください。